赤ちゃんの四季（47）　平成24年秋

乳幼児虐待から学童のいじめへ

大津の中2いじめ自殺事件が大きく報道され、学童のいじめへの社会的関心が高まっています。乳幼児虐待も、学童のいじめも、家庭内、学校内での家族、仲間による無抵抗な弱者へのいじめです。いずれも閉ざされた中での出来事で、外からはなかなか発見しづらく、エスカレートすると大事件に結びつきます。

病室で、自ら虐待した乳幼児の看護に当たる母親の多くが、優しい眼差しで、我が子に寄り添っています。誰かがそっと手を差し伸べていたらと無念でなりません。学童のいじめも同じで、いじめている子も、いじめられている子もごく普通の子どもたちでしょう。

私たちは、子どもを守る立場から、乳幼児虐待を疑うと児童相談所や警察署に速やかに届け出るようにしています。学校内でも、いじめと判断すれば同様の届け出をされるでしょうが、判断の難しい場合もあるでしょう。いじめている子も、いじめられている子も自分の可愛い教え子ですから。

いま学校教育現場で起こっている問題の解決には、「少人数学級化」が一番です。一学級当たり児童生徒数の国際比較では、わが国の国公立学校での平均学級規模(2008年)は、初等教育28.0人、前期中等教育33.0人であり、OECD平均（それぞれ21.6人と23.7人）を上回り、もっとも高い国の一つになっています。初等中等教育費の対GDP比でも、わが国はOECD加盟36カ国中ワースト3です。小児の保健医療費と同様で、日本の子ども対策が軽んぜられているのが一目瞭然です。

家庭教育が崩壊しているいま、人間教育は学校でしかできません。「少人数学級化」を実現し、教師が、生徒一人一人と毎日じっくり時間をかけて向き合うことが一番です。そうすれば、わざわざアンケート調査しなくても、いじめのエスカレートを未然に防ぐことが可能となるでしょう。